

宇都宮市埋蔵文化財報告第18集

聖山公園遺跡Ⅲ

—昭和59年度発掘調査概要—

昭和60年3月

宇都宮市教育委員会

発刊にあたって

宇都宮市営聖山公園(市営第2霊園)建設に伴う同名遺跡の発掘調査は、5年計画で進めておりますが、その第3か年目にあたる昭和59年度の調査を終了いたしました。

今年度も、古代人の生活の跡である住居跡や墳墓等を多数検出することができましたが、なかでも遺跡が立地する台地の南東端から、調査開始以来初めて検出した縄文前期の住居跡群は県内でもたいへん貴重な例となりました。

このたび、今年度(昭和59年度)の調査成果のあらましとして本書を刊行いたしました。各方面で活用され、郷土の古代史解明の一助となれば幸いです。

末文になりましたが、調査にあたり終始御教導いただきました栃木県教育委員会文化課、栃木県立博物館、栃木県文化振興事業団の各指導機関及び指導委員の国士館大学教授大川清先生・専修大学教授久保哲三先生・宇都宮市文化財保護審議委員会委員塙静夫先生・小堀時蔵先生に対しまして厚くお礼申し上げます。

なお、聖山公園遺跡の調査は、本年度以降も引き続き実施いたします。上記の各機関各位をはじめとして関係する方々の一層の御指導、御支援をお願い申し上げます。

昭和60年3月31日

聖山公園遺跡発掘調査団長

宇都宮市教育委員会教育長 後 藤 一 雄

例 言

- 1 本書は、昭和59年4月～同年12月に実施した宇都宮市上欠町に所在する聖山公園遺跡（宇都宮市営第2霊園造成地）の発掘調査概要報告である。
- 2 発掘調査は、宇都宮市教育委員会が主体となり、次頁に示したとおりの調査組織に基づき実施したものである。今回は第3次調査であり、今後も継続して調査を実施する予定である。
- 3 遺構・遺物の整理・実測等は、金田信夫の協力を得て、梁木誠がこれにあたった。また、遺物写真撮影に際しては栃木県立博物館橋本澄朗・上野修一両氏の御指導を得た。記して感謝の意を表する。
- 4 本書の執筆は、定岡明義、手塚英男、梁木が、編集は梁木がこれにあたった。
- 5 6号墳出土の鉄器を中心とした考察に関しては、栃木県文化振興事業団齋藤弘氏の研究成果を掲載させていただいた。氏の御厚意に深く謝意を表する。
- 6 発掘調査中、市民生活課・今井操、黒崎民雄、福島重文、公園緑地課・大森功壺の各氏には種々の御協力を得た。記して感謝の意を表する。

[調査組織表]

●調査団組織



●昭和59年度調査団

団 長	教 育 長	後藤一雄	指 導 機 関	栃木県教育委員会文化課	
副 団 長	教 育 次 長	田中敏夫	◇	栃木県立博物館	
事 務 局 長	社会教育課長	加藤悦男	◇	栃木県文化振興事業団	
事 務 局 次 長	文化振興係長	小林錦一	指 導 委 員	国士館大学教授 大川 清	
事 務 局 員 (調査員)	文化振興係 (担当者)	定岡明義	◇	専修大学教授 久保哲三	
		手塚英男	◇	市文化財保護委員 堀 静夫	
		◇	◇	小堀時藏	
		梁木 誠	◇	◇	
調 査 員 補	市文化財調査員 本遺跡調査員	阿部信弘	参 与	民 生 部 長 荘司利明	
		松本笑悦 金田信夫	調 整 担 当	都市開発部長 大橋 勇	
				市民生活課長 川島侯司	
				公園緑地課長 斎藤亨二	
				市民生活課 森田 勇	
		◇	黒崎民雄		
◇	貝沼三雄				
◇	菊池 博				
聖山公園管理事務所 今井 操					
◇	福島重文				
調 査 補 助 員	安生サキ	安生ミカ	小林ミキ	小林マサ	斉藤イク
	佐藤正男	島崎熊夫	福田カネ	福田タイ	福田タイ
	堀田一夫	松本恵美子	松本和子	松本トシ	松本トリ
	味野和テツ	森ヒロ子	谷中一郎	山崎トキ	波辺フミ

目 次

I 調査の経過

1 調査に至るまでの経過	1
2 前年度までの調査概要	1
3 本年度の調査概要	4

II 6号墳の調査

1 遺構	9
2 遺物の出土状態	13
3 遺物	19
4 まとめ	26

聖山公園6号墳出土の鉄製品等について	27
--------------------	----

挿 図 目 次

第1図 聖山公園遺跡周辺遺跡分布図	2
第2図 聖山公園遺跡遺構配置図	7
第3図 6号墳現況測量図	9
第4図 6号墳全体図	11
第5図 6号墳断面図	13
第6図 6号墳土坑1 鉄器出土状況	14
第7図 6号墳土師器甕1 出土状況	16
第8図 6号墳須恵器提瓶出土状況	17
第9図 6号墳須恵器平瓶出土状況	18
第10図 6号墳出土土師器(1)	19
第11図 6号墳出土土師器(2)	21
第12図 6号墳出土手づくね土器	22
第13図 6号墳出土須恵器甕A	23

第14図	6号墳出土須恵器甕B	24
第15図	6号墳出土須恵器	25
第16図	聖山公園6号墳出土鉄器実測図(1)	28
第17図	聖山公園6号墳出土鉄器実測図(2)	29
第18図	聖山公園6号墳出土玉類実測図	30
第19図	瓦塚古墳群中出土鉄器実測図(1)	32
第20図	瓦塚古墳群中出土鉄器実測図(2)	34
第21図	瓦塚古墳群中出土鉄器実測図(3)	37

図 版 目 次

PL 1	(1) 遺跡全景	(2) J-1~3号住居跡遺景
PL 2	(1) J-2号住居跡	(2) J-3号住居跡
PL 3	(1) 30号住居跡	(2) 27号住居跡
PL 4	(1) 発掘前の6号墳全景	(2) 6号墳主体部確認状況
PL 5	(1) 6号墳主体部調査状況	(2) 6号墳主体部
PL 6	(1) 6号墳前庭部石敷	(2) 6号墳前庭部石敷
PL 7	(1) 6号墳主体部付近全景	(2) 6号墳全景
PL 8	(1) 6号墳土坑1上鉄器出土状況	(2) 6号墳土坑1確認状況
PL 9	(1) 6号墳土坑1断面	(2) 6号墳土坑1
PL 10	(1) 6号墳土坑2断面	(2) 6号墳土坑2
PL 11	(1) 須恵器甕出土状況(1)	(2) 須恵器甕出土状況(2)
PL 12	(1) 6号墳周溝北西部手づくね土器 ・土師器群出土状況(1)	(2) 6号墳周溝北西部手づくね土器 ・土師器群出土状況(2)
PL 13	(1) 6号墳周溝北西部手づくね土器 ・土師器群出土状況(1)	(2) 6号墳周溝北西部手づくね土器 ・土師器群出土状況(2)
PL 14	(1) 6号墳土師器甕1出土状況	(2) 6号墳須恵器提瓶出土状況
PL 15	(1) 6号墳須恵器平瓶出土状況	(2) 6号墳須恵器平瓶出土状況
PL 16	6号墳出土土器	
PL 17	(1) 6号墳出土須恵器甕A	(2) 6号墳出土須恵器甕B
PL 18	6号墳出土手づくね土器	



6号墳発掘風景

I 調査の経過

1 調査に至るまでの経過

姿川と武子川に挟まれた台地上の山林と畑——上欠町聖山公園造成予定地は、古代人の生活の場である集落跡と古墳の点在する遺跡の宝庫である。北山霊園に次ぐ第2霊園造成地の選定作業のなかで、上欠町にその具体的な造成計画の意向打診が行われ、その後、可能な限り遺跡の保存を大原則に内部協議が進められていった。

55年8月 霊園造成計画の地元説明会に前後して、市教育委員会独自の遺跡分布調査を行い、遺跡保存のための庁内協議を進めた。

56年8月 遺跡の開発が確定的になるなかで、「埋蔵文化財の保護と開発に関する基本方向」を定め、現状保存のための方策を更に検討した。

11月 市教委の直営事業として発掘調査を行うことになり、発掘調査計画策定のための市教委独自の最終調査を行った。

12月 県教委から遺跡保存及び発掘調査計画策定のための指導を受けた。

57年2月 法57条の3の規定に基づく工事等による埋蔵文化財発掘通知書を提出した。

3月 遺跡保存及び発掘調査計画の検討案について学識経験者の指導を受けた。

4月 発掘調査のための新規職員を向かえ、事務局体制を確立し、詳細実施計画の策定に着手した。

法98条の2の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知書を提出した。

埋蔵文化財発掘調査に係る危険防止対策要綱を定めた。

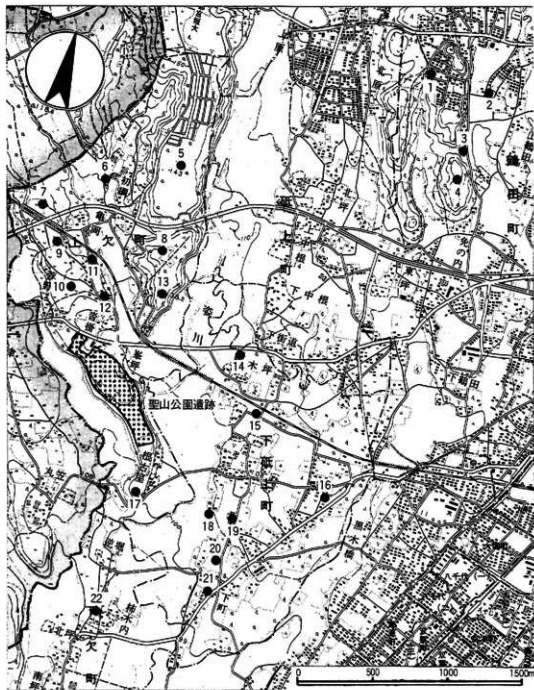
指導委員・指導機関も含めた発掘調査団を組織した。

以上の経過により、発掘調査による記録保存のやむなきに至ったが、造成計画において、遺跡の広場の設置、現状保存区域の拡大などの成果をもって発掘調査実施へと進んでいった。

2 前年度までの調査概要

(1) 第1次（昭和57年度）の概要

昭和57年度は霊園基地の造成計画に基づき、第1次造成地区である台地南西緩斜面沿いの一隅及び霊園への導入路にかかる1・2号墳と経塚について発掘調査を実施した。検出された遺構は、上記2基の古墳と3基の経塚以外に9軒の竪穴住居及び各種土坑等である。ここでは、主な遺構の特徴とその出土遺物について略述することとしたい。



- | | | | | |
|-----------|----------|------------|-------------|-----------|
| 1 鶴田中原遺跡 | 6 初網遺跡 | 11 亀岡古墳群 | 16 並塚遺跡 | 21 下砥上古墳群 |
| 2 羽黒下四地遺跡 | 7 高尾神遺跡 | 12 定使古墳 | 17 犬飼城跡 | 22 下欠北原遺跡 |
| 3 長峰遺跡 | 8 富士山台遺跡 | (13 稲荷古墳群) | 18 主計内遺跡 | |
| 4 亀が窪古墳群 | 9 亀岡坪遺跡 | 14 越の内古墳 | 19 下砥上堂宮塚古墳 | |
| 5 上欠四地遺跡 | 10 香掛遺跡 | 15 宿坪遺跡 | 20 ひのき内遺跡 | |

第1図 遺跡分布図

1号土墳

1号住居跡の床面下より検出された縄文時代中期の土墳である。直径1.07m、深さ0.27mを測る円形土墳であり、底面のほぼ中央より注口土器の完形品が検出された。注口土器は口径28cm、器高24cmの浅鉢形のもので、同器種としては県内でも古い段階に位置付けられるものである。

1号墳

台地の南緩斜面上に立地した円墳である。墳丘は径12m、高さ1.2mと小規模なものであり、内部全体は南に開口する横穴式石室である。石室は全長3.9mの袖無形で、奥壁に凝灰岩の切石、側壁には川原石が使用されたものである。検出された遺物は、石室内より直刀一振とガラス小玉4個、石室外の前庭部より土師器杯1個である。出土した土師器杯や石室の形態等から7世紀頃の築造と考えられるものである。

2号墳

1号墳の北方約25mの台地上平坦部に立地した円墳である。墳丘は径18.9m、高さ1.35mの規模を有し、内部主体は中心部に掘られた長さ2.56mと2.9mの2基の長方形土壇である。このうち第2主体部とした土壇より鉄製の銀先が1点検出されている。また、墳丘南側斜面上からは、葬送儀礼に使用したと思われる9個の土師器杯と1個の須恵器甕がたまって出土している。この他にも、周溝内より大・小の土坑及び柱穴と思われるピットが多数検出されている。築造時期は、出土した土器から6世紀後半代と考えられる。

住居跡

検出された9軒の竪穴住居跡はいずれも古墳時代後期のものである。平面規模は1辺が7.7mの大形のもの(1号住居跡)から1辺3.5mの小形のもの(5号住居跡)と大小のパラツキがみられる。小形のものを除いて総てカマドを有しており、川原石などを焚口部の芯として多用しているのが特色である。また、貯蔵穴内からの土器の出土例もいくつかみられる。出土遺物は土師器が中心であるが、須恵器(1号住居跡)や磁石(3号住居跡)の出土も少数ながらみられる。出土した土器等から6世紀前半代を中心とした集落と考えられ、同台地に立地する円墳群との関係が興味深い。

経塚

「しろみち(城道)」と呼ばれる台地中央部を通る道沿いに3基ならんで立地した塚である。いずれも、径6~7m、高さ1m強の円形塚である。このうちの真ん中に位置する2号経塚の頂部より経筒が出土している。経筒は銅製(鍍金の痕が一部に残る)で、高さ10.8cmの六角柱状を呈したものである。なお、この経筒の側面は銘文とともに「享祿二天二月吉日」の年号が刻まれている。室町時代末期のものと考えられる。

(2) 第2次(昭和58年度)の概要

昭和58年度の発掘調査も霊園墓地の造成計画に先行して実施することとし、主に遺跡が

立地する台地の中央部を調査した。検出された遺構は、竪穴住居跡10軒、土坑5基、溝状遺構数条及び円墳1基であり、その主な遺構と遺物について略述することとした。

住居跡

検出された10軒の竪穴住居跡は、台地平坦部に集中しており調査をした7軒の住居跡はいずれもカマドを有するものであった。住居跡からの出土遺物には、多数の土師器以外に磁石等も検出された。なお、出土した土器等から住居跡は主に6世紀前半代と考えられるが、前年度同様住居跡の平面規模はバラツキが多いという特徴が認められた。

土 坑

円形のもの4基と方形のもの1基が検出されたが、土坑内からの出土遺物が極めて少ないため、時期・性格等については不明である。しかし、いずれも住居跡群の内部あるいは周辺に位置していることから住居跡に付随したものと見えよう。

6号墳

同墳は、住居跡群の南西に位置する將軍塚の南に隣接している。この古墳は径約15m、高さ0.6m程の小円墳であり、同墳周辺の立木を伐採した際に確認できたものであり、調査は次年度実施することとし、本年度は墳丘測量のみを行った。

子持勾玉

子持勾玉は、住居跡群の南側住居外の地下約40cmの所から出土しており、宇都宮市で発掘で出土したのはじめてである。遺物の大きさは、長さ8.5cm、厚さ3cmで石質は、堆積岩の一種のシルト岩が使われており、細かい装飾もなく粗い作りになっている。また、色は茶褐色をしており、火を受けた形跡がみられる。

3 本年度（昭和59年度）の調査概要

(1) 調査計画

霊園の造成対象地区面積は約12ha（台地上平坦部）に及ぶ広大なものである。そこで、この造成計画策定に当っては、①遺跡は極力保存するよう土の移動は最小限におさえる、②遺跡の保存状態が良好と考えられるところは緑地や広場として保存するという2点の方針を定めた。さらに、この対象地区内には、③既に関東ローム層の深い部分まで現状変更が行われ遺構の壊滅が確実なところ、④急傾斜地で現状変更の及ばないところがある。従って、以上4点から実際の発掘調査対象地区面積は、造成対象地区面積の半分の約6haということとした。また調査期間については、造成計画に先行して現地での発掘調査を終了することを原則とし、5か年と定めた。

この調査5か年計画の第3年次である本年度は、年度別造成計画の順に従って、主に昨年度調査地区に続く南東部約1haを調査対象地区とした。なお、同地区は昨年度同様遺構の保存状態が良好と思われたため、当初より全面調査を行うこととした。

(2) 調査地区

今年度の調査地区は昨年度の調査地区の南東に続く約1haの部分である(第2図参照)。同地も昨年度同様この聖山公園遺跡を載せる台地のほぼ中央部に位置しており、南側沖積面(水田)に至る斜面は、同地からのそれが他の部分に対してより緩やかであるという特徴もみられる。なお、平坦部の標高118.5m、沖積面からの比高11mを測る。

今年度の調査の重点は、前年までと同様本遺跡の主力遺構である古墳時代後期の住居跡の検出にあるが、将軍塚(現状保存)の南に隣接する6号墳の調査が予定されていた。

なお、榎木街道から本遺跡が所在する台地の西側を通過する道路予定地の調査も今年度前期(9月末)中に調査を終了しなければならない場所であった。

(3) 調査経過

第3次調査は、昨年度までと同様4月中旬から開始し、12月初まで行った。今年度も調査期間中(10-11月)に宇都宮市内の他遺跡において緊急の調査があったため、この間、予定した面積の調査を完了することができた。

遺跡の調査が中断あるいは半減したが、それでも例年になく天候に恵まれたため、ほぼ予定した面積の調査を完了することができた。

なお、主な遺構の調査期間は次の表のとおりである。

昭和59年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
6号墳	—————								
24号住			——						
25号住			——						
26号住				——					
27号住				——					
28号住					——				
29号住					——				
30号住						——			
31号住						——			
J-1住					——	——			
J-2住							——	——	
J-3住								——	
次年度調査を排す									—————

(4) 検出された遺構と遺物

今年度は将軍塚古墳の周辺とそれに続く外周道路敷設部分の調査を行ったわけであるが、縄文時代から古墳・奈良時代までの竪穴住居跡及び円墳1基(6号墳)を検出すること

ができた。今年度の調査地区は、本遺跡内において台地幅が最も狭くなる部分であり、台地上平坦部の幅は90～100mである。

検出された遺構遺物を時代毎に略述すると次のとおりである。

縄文時代 (PL 1～2参照)

台地の東側縁辺部近くに検出された3軒の竪穴住居跡(J-1～3号住)である。3軒は約30m四方の範囲にかたまり、最も東寄りに位置するJ-3号住から台地の東端までの距離は僅か10m程である。いずれもほぼ南北に軸をとる隅丸長方形の平面プランであり、その規模はJ-1号住が6.7×4.8m、J-2号住が6.1×4.1m、J-3号住が4.8×4.2mである。なお、J-3号住は他の2軒と異なり、方形に近いプランとなっている。炉は3軒とも地床炉であり、中央北寄りに敷設されたものである。また、柱穴はいずれも6本であるが、J-3号住は、4本の支柱穴に南北方向に2本の棟持柱がつくという形態をとっている。

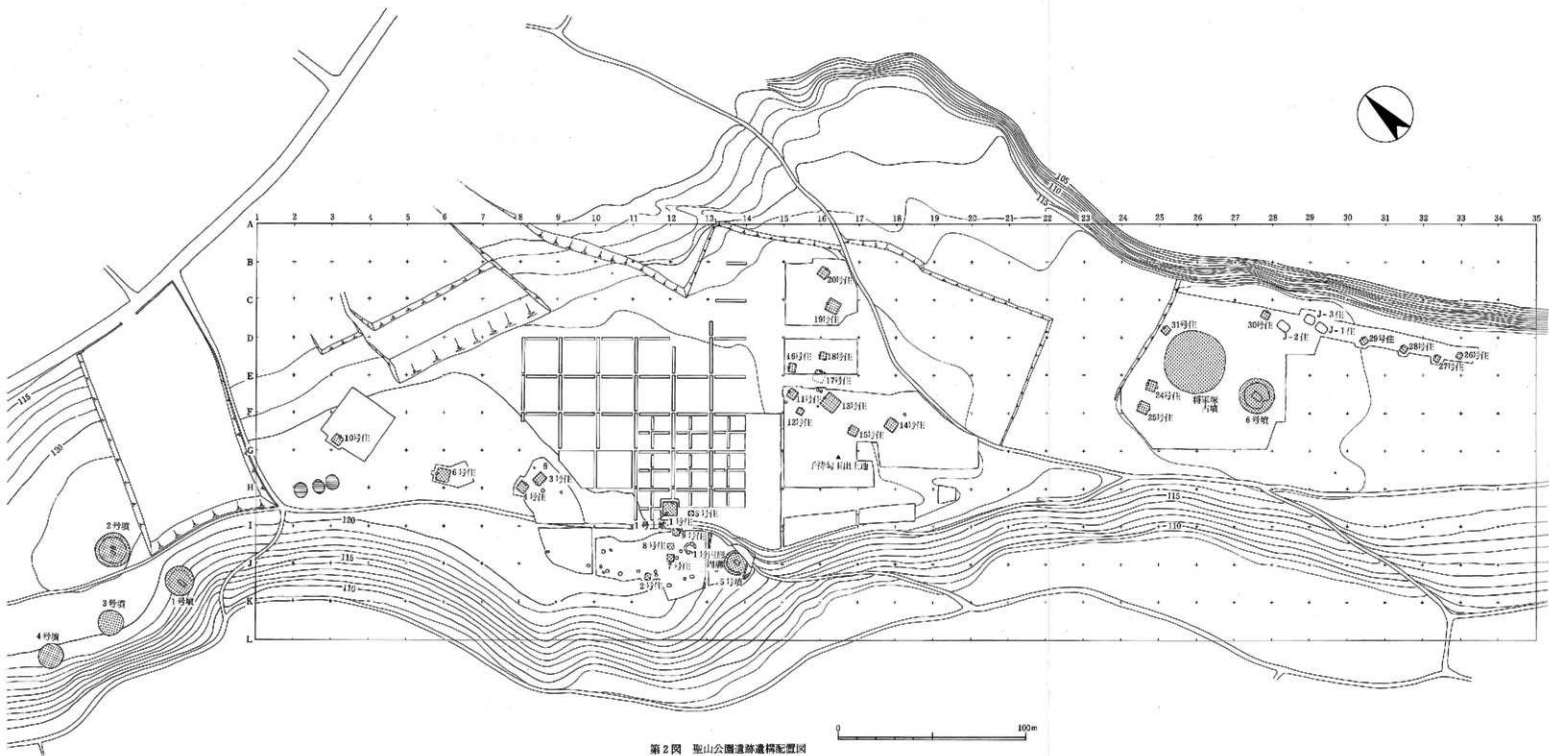
遺物は全体に少なく、各竪穴とも数十片の破片が出土したのみである。縄文前期後半の黒浜期のものが中心である。

古墳時代 (PL 3-1参照)

將軍塚古墳を取り囲むような状態で検出された4軒の竪穴住居跡(24・25・30・31号住)と円墳1基(6号墳)である。24・25号住居跡は將軍塚古墳の西側に東西に並んで位置するものであり、いずれも両壁に張り出しピットを有する形態である。31号住居跡は將軍塚古墳に最も近く位置するもので、周溝外側から5・6mの距離にある。將軍塚古墳の東側に位置する30号住居跡は、他の3軒からやや離れて一軒存在するものであるが、滑石製の白玉が2個検出されている。なお、6号墳については後述する。

奈良時代 (PL 3-2参照)

台地の東側縁辺沿いにはほぼ一列で検出された4軒の竪穴住居跡(26～29号住)である。最も南から検出された26号住居跡以外は、北壁にカマドを有してやや東西に長い長方形の平面プランのものである。各住居跡の規模は26号住が3.1×3.3m、27号住が2.7×3.3m、28号住が2.9×3.4m、29号住が3.2×4.4mであり、いずれも古墳時代のものに比較して小型である。遺物は土師器と少量の須恵器が伴出しているが、土師器坏には、ロクロ技術導入直前時の様相がみられる。なお、27号住居跡出土の土師器坏底部外面には「稿」という墨書がみられる。



第2图 聖山公園遺跡遺構配置図

Ⅱ 6号墳の調査

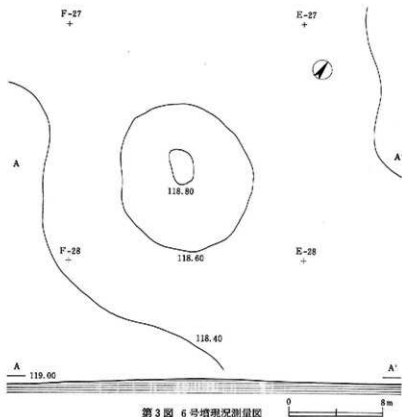
本墳は將軍塚古墳の南13mに位置するものであり、昭和59年4月中旬～6月上旬にかけて発掘調査したものである。本墳の存在が確認されたのは、昭和58年の10月である。これは後述するが本墳が高さ0.5mに満たないという非常に低いものであったため、周辺の雑木を伐採してはじめてその存在に気が付いたというものである。つまり、本遺跡の発掘が開始された昭和57年の段階では確認することができなかったものである。

1 遺構

(1) 発掘前の墳丘

発掘前の墳丘の状況は第3図で示すとおり高さ40cm前後、径10m前後の円墳であり、肉眼では、僅かな地膨れが感じられる程度の極めて小規模なものであった。前述したように発掘前は雑木林であり、下草や低木のためまったく確認することができない状態であった。なお、地元の人話では、戦時中の食糧増産に伴いこの辺が開墾されたということであり、その際に本墳の墳丘も削平された可能性が高いと考えられる。伐採後、本墳南西の一郭に積み重ねられた川原石が検出されたが、開墾時に片付けられたものともみられる。

発掘調査は、墳丘の中心を通る十文字のベルトを残す形で進め、周溝が確認された段階でさらに4本のベルトを放射状に設定することとした。



(2) 周溝

周溝は20～30 cmの表土を排除した段階で確認することができた。確認状況は、周溝埋没土上層の黒色土の範囲が露呈したものであり、その形状は現墳丘をとり巻くほぼ正円形のものであった。

周溝の形状は底面が平坦となる逆台形状のものであるが、内側の立ち上がりが外側のそれに対して急であることが特徴である。周溝の幅は最も広い西側で3.4 m、最も狭くなる南東側で2.3 m、また深さは最も広い西側で現表土から1.1 m、最も浅くなる東側で現表土から1.0 mとほぼ一定である。なお、周溝を含めた本墳の大きさは東西で19.2 m、南北で19.6 mである。

(3) 墳丘

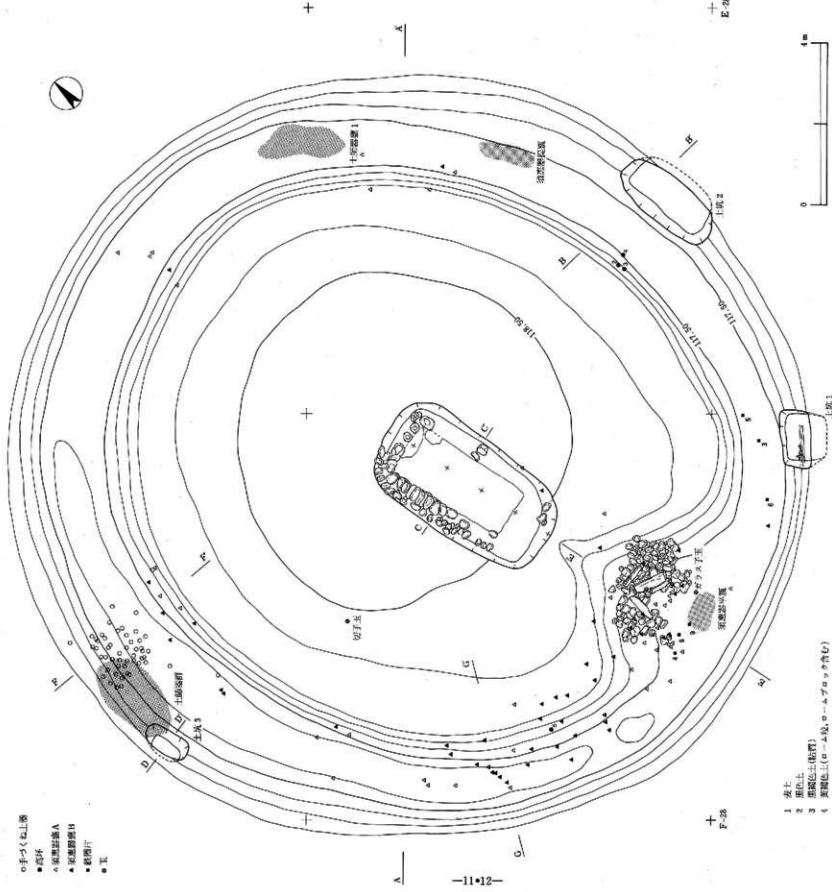
前述したように墳丘はかなり削平されていたわけであるが、中心部近くで僅かに盛土の状況が確認されている。確認された盛土は旧表土整地面上に載ったロームブロックを含む褐色土層であり、中心部で約20 cmの厚さを確認できたものである。盛土の端部は、周溝内側立ち上がり上端から約2 m内側であり、この間は地山を整形し緩やかな斜面としていている。従って、盛土の範囲は周溝よりかなり狭い部分に行なわれたものであり、径8～9 m程度のものであったとみられる。なお、墳丘径は東西で14.5 m、南北で15.5 mであり、やや南北に長い楕円形状を呈している。

(4) 主体部

主体部はほぼ南北に主軸をとる横穴式石室であるが、ほとんどが破壊され、僅かに西壁の一部が残っていただけのものである。掘り方は南北4.8 m、東西2.6 mの隅丸長方形で、南壁に墓道状の溝が付く羽子板状のものとはならない。掘り方の深さは現表土から60 cmであり、地山の旧表土を約40 cm掘り込んだものである。掘り方の中央部には、ロームブロックをつき固めて床面状にした黄褐色土の範囲があり、残存する側壁の線と一致することからこれが玄室の床面を示すものとみられる。これから判断すると玄室の規模は長さ3.1 m、幅1.3～1.4 mで、胴張りのない長方形プランであったとみられる。側壁は、川原石の小口積みであるが、奥壁についても残存するものや石を据えたと思われる窪みから判断して同様に川原石の小口積みであった可能性が強いものと考えられる。なお、前庭部には川原石と割り石が敷かれたような状態で検出されたが、周溝がある程度埋没した後に行なわれたものである。

(5) 土坑

周溝内より3基の土坑が検出されている。いずれも外側立ち上がり部に斜めに掘られているのが特徴である。土坑1は周溝が中位まで埋没した段階で掘り込まれたものであり、形状は1.45×0.75 mの長方形で深さが確認面からで0.8 mを測る。土坑2にもやはり周溝がある程度埋没した段階で掘り込まれたものであり、形状は2.6×1.15 mの隅丸長方形

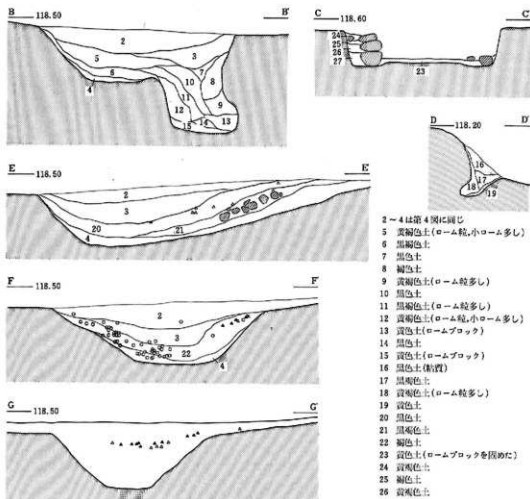


- 1 土曜館跡1
 2 土曜館跡2
 3 土曜館跡3(埋蔵品)
 4 瓦葺き土庫(○-△瓦, ●-△瓦, ●手づくり)

A—118.90



新4図 6世紀遺跡



第5図 6号墳断面図

- 2~4は第4図と同じ
 5 黄褐色土(ローム粒,小ローム多し)
 6 黒褐色土
 7 黒色土
 8 褐色土
 9 黄褐色土(ローム粒多し)
 10 黒色土
 11 黒褐色土(ローム粒多し)
 12 黄褐色土(ローム粒,小ローム多し)
 13 黄褐色土(ロームブロック)
 14 黒色土
 15 黄褐色土(ロームブロック)
 16 黒色土(積置)
 17 黒褐色土
 18 黄褐色土(ローム粒多し)
 19 黄褐色土
 20 黒色土
 21 黒褐色土
 22 褐色土
 23 黄褐色土(ロームブロックを固めた)
 24 黄褐色土
 25 褐色土
 26 黄褐色土
 27 黒褐色土

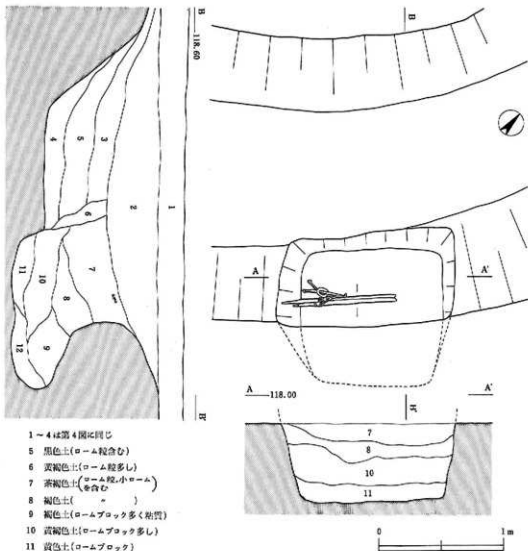
※記号は第4図と同じ

で深さが確認面からで1.15 mを測る。土坑3は1.5×0.6mの隅丸長方形で周溝の外側壁を0.6 m程掘り込んだものであり、周溝埋土を最下層まで掘りあげた段階で確認したものである。

2. 遺物の出土状態

(1) 鉄器 (第6図)

周溝南東部外側に掘り込まれた土坑1の直上より、鉄刀2振、刀子1振、櫛一式が出土している。前述したように本土坑は周溝埋土中位の黒褐色土層から掘り込まれたものであり、本墳築造後ある程度の期間をおいてから掘られたものである。土坑内にはロームブロックを多く含んだ土が層状に堆積し、底面最奥部からは黄褐色粘土が検出されている。埋没



第6図 6号墳土坑1 鉄器出土状況

の状況から判断すると、短期間に埋め込まれたような状況であり、鉄器が検出されたのはこの最上層である。鉄刀2振は土坑の長軸方向に合せて切先が揃い、刀子と嚮がこれらに重なったような状態で検出されたものである。恐らく、これら鉄器は本土坑を埋め立てた後に、置かれたか簡単に埋められたかしたものと考えられる。

なお、本土坑周辺の周溝内及び横穴式石室南の周溝内より刀装具が散乱した状態で検出されている。これらはいずれも周溝埋土中位の黒色土層より出土したものであり、本土坑直上より出土した鉄刀あるいは刀子の刀装具とみられる。

(2) 玉

切子玉とガラス小玉がそれぞれ1個検出されている。切子玉は横穴式石室西側の墳丘裾部近くから出土したものである。墳丘部の表土排除作業中に出土したものであり、ほぼ墳丘面に密着した状態で検出されたものである。

ガラス小玉は横穴式石室南の周溝内より出土したものである。出土層位は刀装具や須恵器平版の出土した層と同様であり、周溝埋土中位の黒色土中である。

(3) 須恵器甕

須恵器甕は胎土、焼成の異なるA・B2個体が検出されている。両者ともかなりの破片となって広範囲に散布した状態で出土したものである。破片の散布は墳端部から周溝の内側にかけて東部を除くほぼ全域にわたっているが、特に集中する部分は横穴式石室南部の前庭部付近から南西部にかけてである。周溝内より検出された破片をみると出土層位は、埋土の中位～上位の黒色土層中であり、周溝がかなり埋没した段階である。なお、A・B両者には、出土位置及び層位による差異は認められない。

これらのことから、須恵器甕A・Bの2個体は、恐らく前庭部付近で破砕された後、ほぼ墳端部全体にばらまかれたものと想定できる。そして、その時期は、周溝がかなり埋没した段階であることから、本墳築造後かなり時間がたっていたものとみられる。なお、破片の散布が墳丘上まで広がっていたかどうかは、本墳墳丘がかなり削平されていたということから不明である。

(4) 土師器高坏

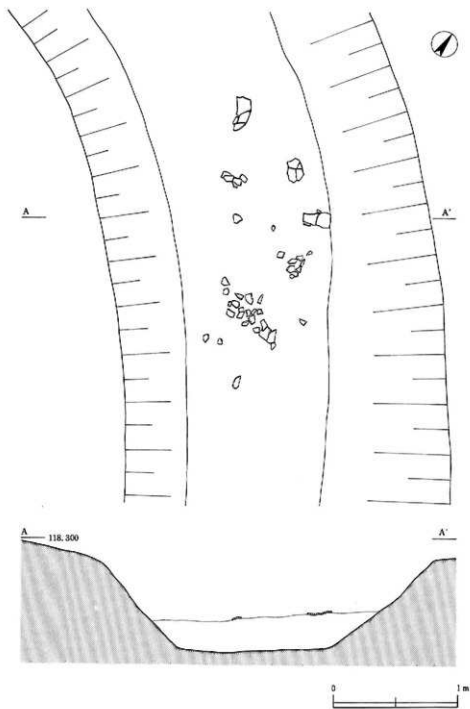
土師器高坏は横穴式石室の東側墳端部より3～4個体、同じく南西部の墳端部より1個体が出土している。いずれも破砕されたものであり、出土層位は須恵器甕と同様である。

(5) 手づくね土器と土師器群

西部周溝外側の一隅より手づくね土器約50個体とそれに付随して多量の細片となった土師器群が集中して検出されている。出土位置は周溝の外側立ち上がり面に片寄っており、手づくね土器が約2m四方の範囲に、土師器群を合せると約3m四方の範囲に集中している。出土層位は周溝埋土の下層であり、本墳築造時かそれに近い時期のものと考えられる。なお、手づくね土器は完形品での出土がほとんどであるが、土師器群はかなりの細片に破かれ投棄されたと思われる状況である。

(6) 土師器甕1 (第7図)

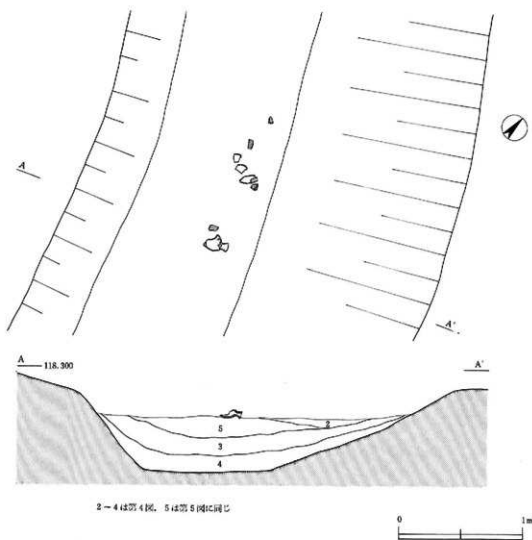
土師器甕1は北東部周溝内より検出されたものである。幅1m、長さ2.5mの範囲から細片で出土したものであり、出土層位は周溝埋土中位の黒褐色土層中である。破片はほぼ一整体分揃っているが、底部の大部分が欠損している。底部穿孔の後に破砕されて周溝内に投棄されたものとも考えられる。



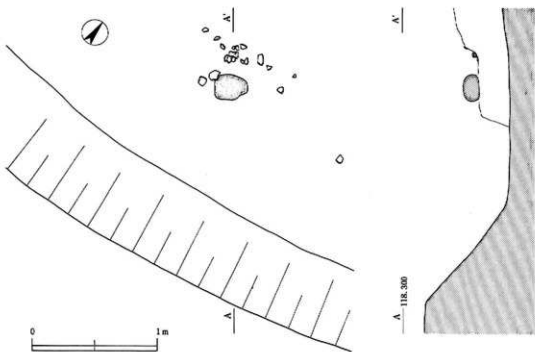
第7图 6号坟土葬器残1出土状况

(7) 須恵器提瓶 (第8図)

須恵器提瓶は東部周溝内から検出されたものである。幅30 cm、長さ1.2 mの範囲に散布したものであり、出土層位は周溝埋土中位のローム粒、ロームブロックを多く含む黄褐色土層上面である。この土層は土坑2の周辺から本土器検出部分の南半部まで分布していたものであり、土坑2掘削の際に掘り上げられたものと考えられる。土坑2は周溝埋土下位の黒褐色土層から掘り込まれたもの(第5図B B')であり、土坑1よりやや古い段階のものと思われる。なお、本土器の破片は総て接合されたが、背面が全く欠損している。周辺には破片もみあたらなかったことからみると、本土器は背面欠損後に破砕され、周溝に投棄されたものと考えられる。



第8図 6号墳須恵器提瓶出土状況



第9図 6号墳須恵器平瓶出土状況

(8) 須恵器平瓶 (第9図)

須恵器平瓶は南部周溝内、横穴式石室前庭部に敷かれた石群のすぐ南から検出されたものである。幅0.5m、長さ1.5mの範囲に細片で分布していたものであり、出土層位は周溝埋土中位の黒色土層中であり、刀装具やガラス小玉などの出土層位と同じである。なおこの土層は、前庭部石群のすぐ上層である。

本土器の破片が散布する中心よりは25cm程度の川原石が一個検出されている。出土層位は破片群と同じであり、胴部片の一つが川原石の上面に密着していたという状況である。また、本土器は周溝東部で検出された須恵器提瓶とは異なり、接合した結果ほとんど完形品となっている。このような状況から、本土器は破砕された後に投棄されたというよりは、この場で割れて飛び散ったと考えられるものである。破片の散布状態からみると、恐らく周溝に置かれた川原石に向って本土器をぶつけたものとみられる。

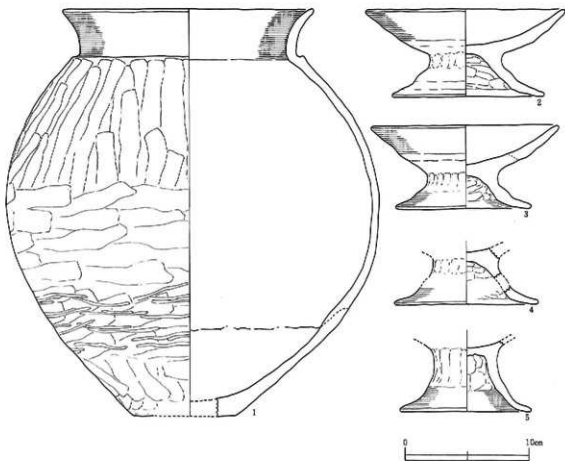
3 遺 物

(1) 土師器甕1 (第10図1)

口径20.2 cm。器高32.7 cm。胴部最大径29.9 cm。ほぼ中位に最大径を有する球胴で、口縁部は外反気味に立つ。頸部外面に横溝によってできた稜を残すのが特徴である。胴部外面は上半及び最下半が縦位、中位から下半が横位のヘラ割りであり、さらに下半部は横位の粗いヘラ磨きで仕上げられている。内面は全面ナデ調整である。胎土には2～3 mmの小砂粒を多く含み、焼成は良好である。危調は明るい褐色で、胴部に黒斑がみられる。

(2) 土師器高环 (第10図2～5)

2は口径15.9 cm。器高6.9 cm。脚径12.2 cm。环部は外面に僅かな稜を有して口縁部が外方へ開き、脚部は中程で僅かな膨みを有して裾部が大きく開くものである。环部の



第10図 6号墳出土土師器(1)

内面は丁寧なヘラ磨きで仕上げられ黒色処理が施されている。また脚部の内面はヘラ削りされている。胎土には微砂粒を含み、焼成は良好である。坏部内面黒色で、他は暗褐色を呈する。3・4とも2とほぼ同じつくりであり、胎土・焼成・色調も類似したものである。3は口径15.0 cm。器高6.6 cm。脚裾部径10.8 cm。4は脚裾部径11.5 cmである。

5は脚部のみであるが、2～4とは異なるものである。残存高5.7 cm。脚裾部径10.5 cm。胎土は緻密であり、淡い褐色を呈し、内面は黒色処理されない。

(3) 土師器群 (第11図1～11)

甕、小形甕、埴、坏、などが細片となつてかなり出土しているが、器形の復元できるものだけを図面化した。接合不可能な破片が多いため、推定の個体数を示すと、甕4～5個体、小形甕4～5個体、埴5～6個体、坏10個体前後である。

甕 (1・2)

口縁部と底部の破片を図化した。他に接合不可能の胴部片が何片か出土している。1は口径24.5 cm。底径8.5 cm。内外ともヘラナデで、外面はさらに粗いヘラ磨きで仕上げている。胎土には粗い砂粒を含み、焼成良好で、淡褐色を呈する。2は口径18 cm。底径8.8 cmで、胎土は粗く焼成もあまい。赤褐色を呈する。

小形甕 (3・4)

3は口径13.7 cm。底径6.7 cm。推定器高19.6 cm。外面は縦位のヘラ削り後胴中～下部を粗いヘラ磨きで仕上げている。内面はヘラナデ。胎土にはやや粗い砂粒を含み、淡褐色を呈する。4は口径12.0 cm。内面をヘラナデ後粗くヘラ磨きするのが特徴である。胎土に砂粒を若干含み、焼成はあまい。暗褐色を呈する。

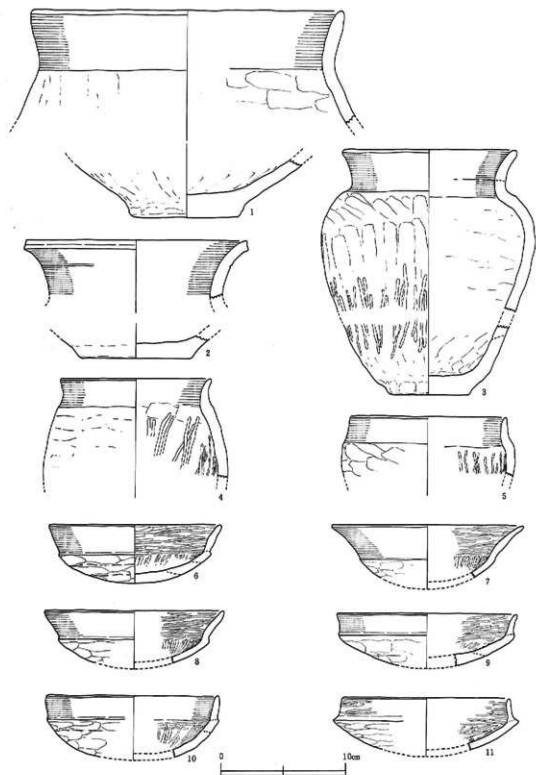
埴 (5)

口径12.2 cm。外面はヘラケズリ、内面はヘラ磨きで仕上げている。胎土は砂粒を若干含み、焼成はあまい。暗褐色を呈する。

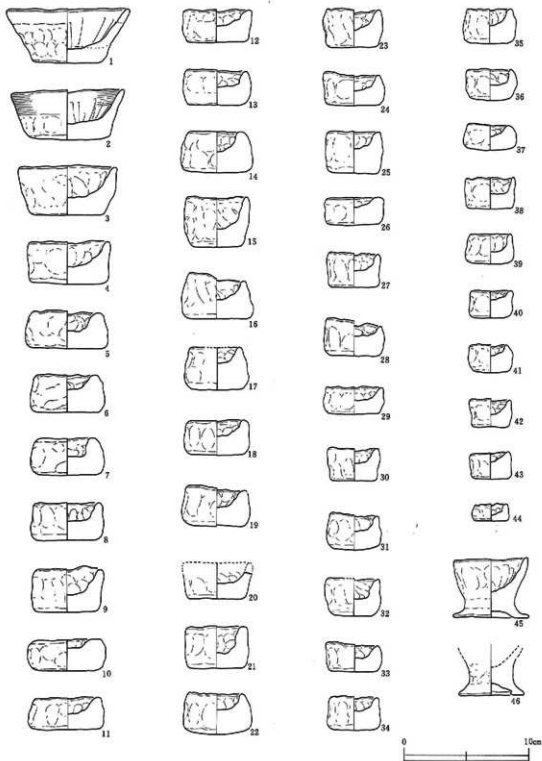
坏 (6～11)

6～8はほぼ筒形で、外面に稜を有して口縁部が外反するものである。いずれも外面ヘラ削り、内面ヘラ磨きで仕上げている。6は口径13.8 cm。器高4.7 cm。胎土は緻密で焼成良く、茶褐色を呈する。7は口径15.3 cm。胎土は緻密で、焼成良く、内面が赤彩されている。8は口径14.2 cm。胎土は緻密で、焼成良く、茶褐色を呈する。9・10は口縁部がやや短かめで、直立気味のものである。9は口径14.2 cm。胎土は緻密で、茶褐色を呈する。10は口径13.7 cm。胎土は緻密で、焼成良く、淡い褐色を呈する。いずれも外面ヘラ削りで、内面はヘラ磨きされている。

なお、11は埴丘表土を排除している時に地表近くから出土したものである。外面に鋭い稜を有して口縁部が内傾するものである。底部外面がヘラ削りで、他は総てヘラ磨きされている。胎土は緻密で、焼成は非常に良く、内面が黒色処理されている。推定口径13.3 cm。



第11图 6号填出土土器(2)



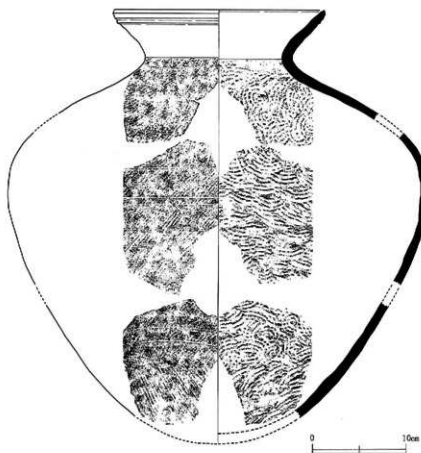
第12图 6号墳出土手づくね土器

(4) 手づくね土器 (第12図)

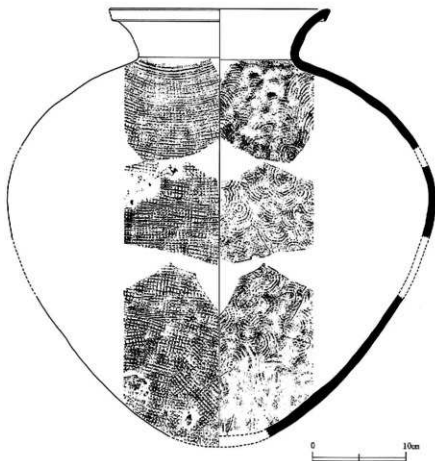
器形は、大形で口縁部が外へ開くもの(1~3)、口縁部がほぼ直立するぐい呑み形のもの(4~44)、高環形のもの(45・46)の3種に分かれる。大きさは、大小さまざまで、最も大きい1で口径9.6 cm。器高4.5 cm。底径5.5 cm。また最も小さいもので口径2.4 cm。器高1.4 cm。底径2.6 cmである。胎土は小砂粒を少し含むものと、微砂粒を多く含む砂質のものとの2種があり、色調は茶褐色のものが多く、まれに暗褐色のくすんだものもみられる。焼成は終じて良好である。

(5) 須恵器甕A (第13図)

口径22.2 cm。推定器高46.0 cm。推定胴部最大径44.5 cm。口縁部は大きく外反し、口唇部外面に稜を有する。胴部は肩部に最大径がくる球形で、底部も丸くなるものと思われる。胴部外面は平行タタキの後、頸部直下から底部近くまで、2~3本一組の横線が施されている。タタキ方向は、横線が施されている部分は左下がりでであるが、横線がなくなる底部近くでは右下がりとなっている。胴部内面には同心円文が残る。口縁部は内外



第13図 6号墳出土須恵器甕A



第14図 6号墳出土須恵器壺B

面ともロクロ撫である。胎土には2～3mmの白色砂粒を特徴的に含み、焼成はややあまく、暗青灰色を呈する。

(6) 須恵器壺B (第14図)

口径22.5cm。推定器高46.5cm。推定胴部最大径45.5cm。口縁部は大きく外反し、口唇部が折り反される。胴部は胴部に最大径を有する球胴で、底部も丸くなるものと思われる。胴部外面は格子タタキで、その後上半部にはカキ目風のヘラ描き横線が施される。胴部内面には同心円文を残すが、底部付近はナア消している。口縁部は内外ともロクロ撫で、胎土は緻密で、1mm前後の黑色粒子が特徴的に含まれている。焼成は極めて良好で、黒青灰色を呈する。また、肩部には自然釉が付着する。

(7) 須恵器提瓶 (第15図1)

口径5.2cm。器高19.4cm。胴部最大径14.9cm。口縁部は僅かに外反して立ち、端部は丸くおさまる。胴部前面は球形、背面は欠損するが扁平になるものと思われる。側面に

はボタン状の把手が付けられている。胴部前面はカキ目で、他はロクロ撫である。なお、胴部前面の内面には、成形時に蓋をした接合部が残っている。胎土には3 mm 前後の白色砂粒をまばらに含んでいる。焼成は良好で、淡青灰色を呈する。

(8) 須恵器平瓶(第15図2)

口径4.8cm。器高15.1cm。

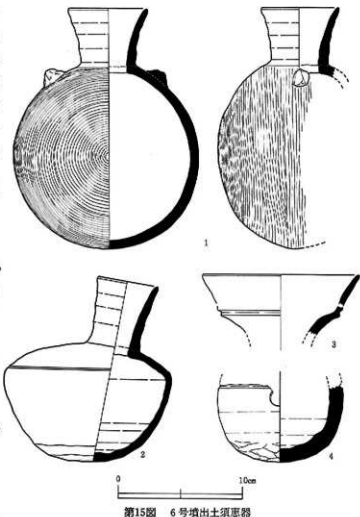
胴部最大径13.5cm。口縁部は比較的長めで、僅かに外反しながら立つ。口唇部はやや尖り気味となる。胴部は肩部に一条の沈線がめぐり、丸味のある底部へと至っている。底部外面は回転へら削り調整され、他は総てロクロ撫で。胎土は緻密であり、1 mm 前後の黒色粒

子を特徴的に含むものである。焼成良好で、灰白色を呈する。胴部外面の上半には自然釉が薄く付着している。

(9) 須恵器甗(15図3・4)

3・4とも須恵器平瓶の検出された部分の近くから出土したものであり、同一個体の口縁部と胴部下半の破片である。推定口径12.5 cm。胴部最大径10.1 cm。円孔径1.3 cm。口縁部は頸部から段を有してのび、外面には丸味のある稜がつく。胴部は球形で円孔のすぐ上に一条の沈線がめぐり、丸味のある稜がつく。胴部外面は手持ちへら削り調整で、他はロクロ撫である。胎土は2~3 mm の白色砂粒を含む。焼成良好で青灰色を呈する。

なお、本古墳で検出された須恵器は胎土により、緻密で黒色粒子を特徴的に含むもの(甗B, 平瓶)とこれに対してやや粗く白色砂粒を含むもの(甗A, 提瓶, 甗)の2種に分かれる。また、焼成は総じて前者の方が良好である。



第15図 6号墳出土須恵器

4 まとめ

以上が6号墳の調査概要である。主体部の横穴式石室がほとんど破壊されていたということで資料的には不十分なものであったが、周溝内からの多量の土器出土、周溝内土坑の検出さらに鉄器の出土など、特に周溝に関連した多くの遺構、遺物の事実確認は、思いがけない成果であったと言える。

周溝に伴う遺構・遺物をここでもう一度整理すると、まず遺構は前底部の石敷と3つの土坑(土坑1～3)である。このうち石敷と土坑1・2は、周溝がある程度埋没した段階でつくられたものである。次に遺物は前庭部南の須恵器平瓶と甕片、東部の須恵器提瓶、北東部の土師器甕、北西部の手づくね土器と土師器群、南西と東部の土師器高坏、ほぼ全体に及ぶ須恵器甕片、そして土坑1直上の鉄器である。このうち北西部の手づくね土器と土師器群以外は、総て周溝埋土の中～上層にかけての出土である。このように遺構・遺物の多くは、周溝がある程度埋没した段階のもが多く、本墳築造時に伴うと思われるものは僅かに北西部の手づくね土器と土師器群だけであった。つまり、これら周溝に伴う遺構・遺物のほとんどは、本墳築造後ある程度の年数を経たある時期あるいは何段階かに渡ってつくられまた使用されたものと考えられるわけであり、古墳の特に周溝部を中心にした継続的な使用ということが問題として提示されたわけである。さらにつけ加えるならば、土器類における様々な投棄方法についても、それぞれがどういう目的からの行為であったかということが、今後の大きな研究課題として残されたものと言える。

なお、本墳の築造年代については、周溝北西部から出土した土師器群の年代が問題になるわけであるが、これについては本遺跡集落出土土器の検討とともに本報告の中で考えることとしたい。

聖山公園6号墳出土の鉄製品等について

栃木県立足利工業高等学校教諭

齋藤 弘

1 出土遺物

本古墳では、石室中からの鉄製品の出土はなかったが、土坑1及び周溝内から、鉄製の武器と馬具が出土した。土坑1からは、刀子¹1、鐙1、轡1、鉄刀2が出土した。また、周溝内からは、貴金具1、鞆尻金具1、鞆金具2、雲珠または辻金具の足金具1、鉸具破片1、切子玉1、ガラス小玉1が出土した。

刀子（第16図，1）1は刀子で、鉄刀や轡と共に、土坑1から出土した。鋒は欠損している。刃は19.8 cmを残す。茎長は8.3 cm，身幅は1.6～2.5 cmを測る。刃は平棟平造りで、棟内は薄い。木質の付着はみられない。刃は両面で、錆化のため観察が困難ではあるが、刃は曲線となって切れ込む様である。茎には、木質が残存している。目針穴は、茎の先端近くにあり、鉄製の目釘が通っている。

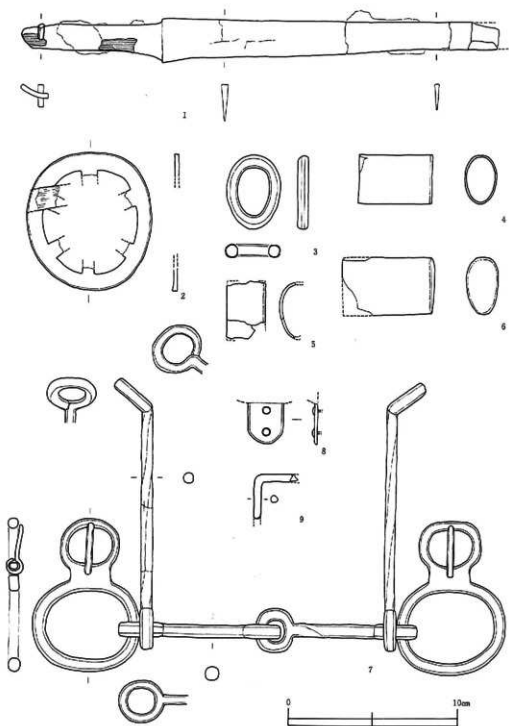
鐙（第16図，2）2は鐙で、1の刀子を茎孔に通した状態で出土した。轡や刀子と錆着している。茎孔の周辺は欠損しており、他の部分も錆化が著しい。楕円形に近い倒卵形を呈する。長径8.1 cm，短径7.3 cmを測り、薄手の造りで、耳にやや厚みがある。八窓もしくは六窓の透しを有するが、錆化のためどちらとも断定はできない。刀子の鞆金具と思われる金属片が錆着している。

貴金具（第16図，3）3は鉄地銀張の貴金具である。周溝内で出土した。長径4.3 cm，短径3.2 cmを測る。断面は隅丸方形で、微かな稜線が走る。銀は、方形断面の三方のみを覆っており、内側（鞆木に接する面）は、鉄地のままである。

鞆金具（第16図，4，5）4は鉄製鞆金具である。周溝内で出土した。長4.3 cm，断面長径2.8 cm，短径1.9 cmを測る。内部にはやや木質が残る。5も同じく周溝内で出土した鞆金具である。長2.3 cm。推定で、断面長径3.4 cm程となろう。折損面に緑青が付着しており、鉄地金鋼張の可能性はある。

鞆尻金具（第16図，6）6は鞆尻金具で、同じく周溝内で出土した。長5.4 cm，断面長径3.3 cm，短径1.8 cmを測る。先端には、若干丸味がある。折損面に緑青が付着する。

轡（第16図，7）7は鉄製の轡である。刀子・鐙・鉄刀とともに、土坑1内に、折り畳んだ状態で置かれていた。欠損部はないが、刀子などと錆着している。特に銜や鏡板は錆化が著しく、細部の観察は不可能であった。鏡板は、長径9.0 cm，短径6.4 cm程と、やや小型である。鉸具を有する立間を造り付ける。環部は楕円形を呈する。立間の環は円形に近く、刺金とともに細身である。環部との接合部分は平坦である。引手には、軽く振り



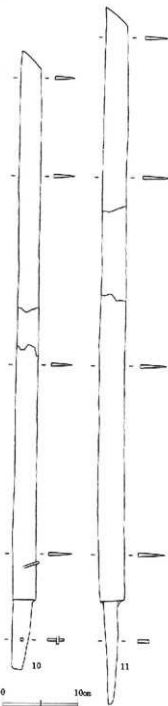
第16图 聖山公國6号墳出土鉄器実測図(1)

が加えられている。長15.9cmを測る。先端の環をくの字に屈曲させ、引手壺としている。環は鉄棒の先端を丸め、環の基部に接合する技法で造られている。接合部分にやや段差があり、やや省力化した造りであると言える。銜は、二連式で、全長17.5cmを測る。先端の環は大型である。右側の金具は、くくみに近い部分で、90°振っている。細部は錆化のため観察不可能である。銜先の環に、鏡板と引手を通すという連結方法をとっている。

足金具（第16図、8）8は、雲珠または辻金具に接合する、足金具であると考えられる。鉄製で、銜が2ヶ所に打たれている。幅2.1cmを測る。周溝内からの出土である。土坑1から、鉄製の轡が出土していること、杏葉などが発見されていないこと、本資料も鉄製であることなどから、土坑1出土轡に伴う、面繫の辻金具の一部と考えた方がよかろう。

鉸具破片（第16図、9）9は、周溝内からの出土鉄製品である。L字形に屈曲している。足金具と同様な理由から、面繫に用いた鉸具の破片であると考えられる。

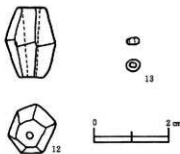
鉄刀（第17図、10・11）土坑1には、刀子や轡と共に、2振の鉄刀が、鋒を揃えて置かれていた。どちらも錆化が著しく、形態の不明な部分が多い。10は、刃長72.4cm、身幅は2.8～3.1cmを測る。茎先端が欠損している可能性もあるが、現状で茎長9.3cmである。刃は平棟平造りで、棟肉は薄手である。鋒は、現状での観察から、鉾鋒であると判断した。関は両関で、刃関・棟関ともに浅く切れ込む。茎は、やや幅広で、中央に目釘穴がある。鉄製の目釘が残存している。関に近い刃の部分に棒状の鉄の付着物がある。刀装具の一部かもしれない。錆化のため、木質の残存は観察できない。11は、刃長79.8cm、茎長13.6cm、茎長3.0～3.3cmを測る。刃は平棟平造り。薄手の棟肉で、鉾鋒である。関の部分は錆化が著しいが、両関と判断した。茎は幅狭で、目釘穴は不明である。錆化のため、木質の残存も確認できない。



第17図 聖山公園6号墳
出土鉄器実測図(2)

切子玉 (第18図, 12) 12は墳丘西裾部で採取した切子玉である。長1.8cmを測る。片側からの穿孔である。透明な水晶製である。

ガラス小玉 (第18図, 13) 13はガラス小玉である。周溝内からの出土した。径0.4cmを測る。明青色を呈している。



第18図 聖山公園6号墳出土玉類実測図

2 遺物の年代

これらの遺物のうち、編年研究が比較的進展している。刀装具・轡・鉄刀について、その年代を考えてみたい。

刀装具では、鏢・資金具・鞘金具・鞘尻金具が出土している。このうち鏢は、出土状態から、1の刀子の拵と考えるとよからう。3の資金具、5の鞘金具、6の鞘尻金具も、内径から考えて、1の刀子の拵となるであろう。3点の刀装具は、土坑1に近い周溝内で一括して出土した。これらが、1の刀子の鞘であったことは、出土状態からも推定できる。

金属製倒卵形の鏢は、共存する須恵器で表現するならば、TK43式の時期に全国的に用いられるようになると考えられている³¹。本古墳出土の刀子の年代も、TK43式以降と考えるべきであろう。

次に轡であるが、細部の観察が錆化のため困難であり、断定的な年代の比定は控えた。本例のように、立間に鉤具を持つ形態は、以前から7世紀代のもものとされてきた³¹。さらに、引手の振り、引手壺の造り、鏡板が小型であることなどから、TK217式に併行する轡である可能性が強いと言えるだろう³⁴。

鉄刀は、2振とも両関で鉾鋒のものである。7世紀代は、両関の鉄刀が主流となる時代である³⁵。また鉾鋒は、奈良時代の大刀に受け継がれる形態である³⁶。これらのことから、本古墳出土の鉄刀は、7世紀代のもものと考えてもよいであろう。

前述のとおり、刀子・鉄刀は、土坑1内にまとめて置かれた状態で出土した。したがってこれらは、同時代の一括遺物と考えられる。そこで3者の年代を合わせ考えるならば、7世紀前半代、併行関係にある須恵器で言うならば、TK209～TK207の年代であると推定できる。土坑1の年代も、これに近い時期であろう。

3 まとめにかえて

最後に、土坑1をめぐる、若干の問題点を示しておきたい。

土坑1は、本古墳周溝がある程度埋没した段階で、墳丘反対側の周溝立ち上がり部分に掘られた。長方形プランで、墳丘の反対方向にオーバーハングしている。埋め戻しは人為的に行われ、その上に、刀子や鉄刀などの武器と、轡などの馬具が置かれた。本古墳には

こうした土坑が、他に2基存在する。また、周溝の各所で、さまざまな儀礼が行われた形跡が調査された。

出土遺物から、土坑の年代は、7世紀前半代に近い時期であると推定できる。周溝内出土遺物としては、他に提瓶・平瓶などがある。これらの須恵器も、周溝がある程度埋没した段階のものである。推定した土坑の年代は、これらの須恵器と矛盾しない。

また、刀子に伴うと考えられる鞘金具等は、周溝内からの出土であった。刀子の刃部には、木質の付着はみられなかった。推論ではあるが、刀子は拔身のまま土坑上に置かれ、鞘は周溝内に廃棄したといった状況も考えられる。このことも、本古墳で行われた儀礼のひとつであったかもしれない。

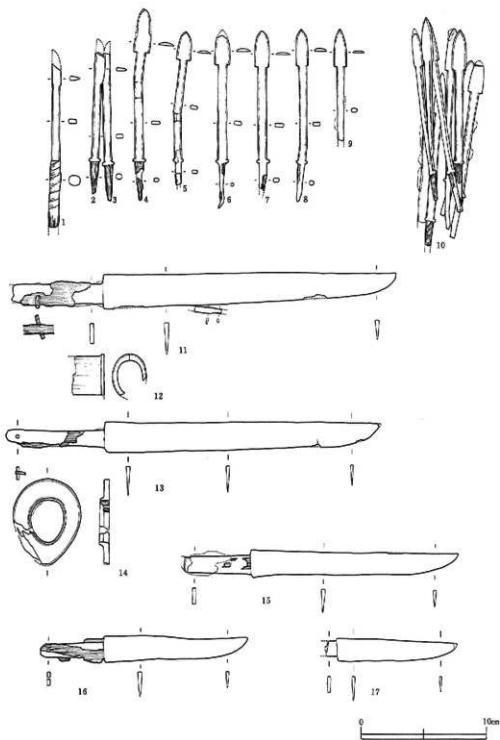
以上のような状況から、土坑1は土坑墓の一種であり、遺物はその副葬品である可能性が強いと言える。しかし、本土坑の大きさでは、成人の遺体をそのまま埋葬することはできない。洗骨葬などを想定する必要がある。類例の増加に期待したい。

もし土坑墓であるとなると、副葬品として、鉄刀や刀装具を有する刀子、実戦的な馬具が一括で出土していることから、被葬者が武人であったと考えられる。そして、これらの遺物が、その武人の基本的な武装の一部であったことは想像に難くない。(付編で紹介する資料は、当時の武装を考える上で参考となろう。)彼は、7世紀前半代の騎上の武人であり、大刀と金銀装の短刀を携えていた。この武人は、当時の兵制の上で、どのような階層に位置する人物であったのだろうか。今後考えたい問題である。

4 付、瓦塚古墳群中出土鉄器

瓦塚古墳群は、宇都宮市長岡町に所在する。丘陵上に立地する古墳群で、前方後円墳1基、円墳41基(近年消滅した古墳も含む)を数える。ここに紹介する遺物は、宇都宮市教育委員会が所蔵する、瓦塚古墳群中出土鉄器である。出土古墳の問題、遺物の年代と意義については、今後に譲ることとし、本稿では遺物を紹介するにとどめたい。

鉄鎌(第19図 1~10) 鉄鎌は、18本以上が所蔵されている。1~3は、轆轤被片関片刃箭式である。刃部はどれも平棟平造りである。1は、現在長13.1cmを測る。鋒は欠損している。寛被の基部から茎にかけて、残存する口巻に覆われている。口巻には幅5mm程の樹皮を用いている。轆も口巻に覆われていると考えられる。2は、現存長11.2cmを測る。鋒が欠損する。茎には木質が残存している。3と錆着している。3は、現存長11.7cmを測る。鋒を欠損している。茎には木質が残る。4~9は、片丸造轆轤被整箭式である。関は明瞭で、鋒はやや鋭利である。4は、長15.4cmを測る。寛被の部分で折れ曲がっている。茎には木質が残る。5は、現存長12.4cmである。寛被で折れ曲がっている。6は、現存長13.8cmである。鋒を僅かに欠いている。7は、現存長12.8cmである。身が幅広な造りである。8は、13.7cmを測る。身・寛被とも、やや幅狭な造りである。9は、



第19图 瓦塚古坟群中出土铁器类图(1)

現存長9.0cmである。鋒が比較的鋭利である。10は、9本の鉄線が錆着している。いずれも、片丸造棘筥被整箭式である。鋒を同じ方向にそろえており、束ねて副葬した状態を示している。

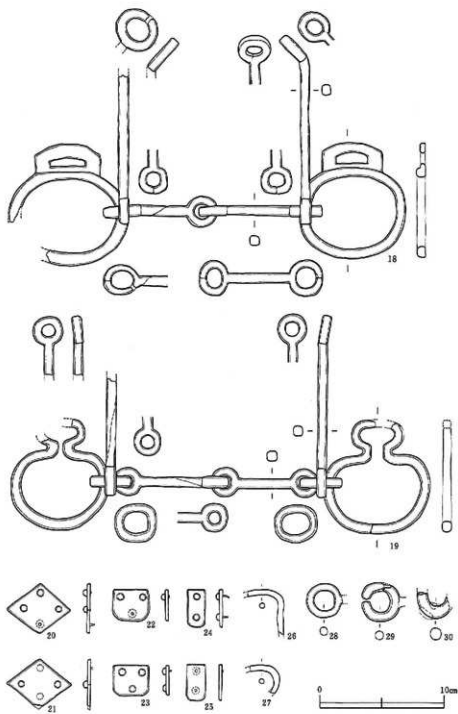
刀子及び刀装具（第19図、11-17）刀子としては、刃渡りが長く刀装具をもつものと、短いものがある。11・13は前者であり、武器であろう。15-17は後者で、武器なのか工具なのか明らかではない。

11は、刃長23.5 cm、茎長6.2 cmが現存する。身幅は1.6~2.9 cm程である。平棟平造りで、棟肉は薄く、鋒はふくらである。両関で、幅広の茎を持つ。茎尻は欠損している。目釘穴の付近は、木質がよく残存している。鉄製の目釘が通っている。刃部には、片関片刃箭式鉄線の破片が付着している。12は、11の柄の破片である。木製で、横幅2.8 cmを測る。柄間から鐔元にかけての部分である。鏝などの金具は、見当らなかった。13は、刃長22.0 cm、茎長7.7 cm、身幅2.0~2.4 cmを測る。平棟平造りで、棟肉は薄く、鋒はふくらである。両関で、やや幅狭な茎をもつ。先端は栗尻である。目釘穴を有し、鉄製の目釘が残存している。木質が一部残る。12は、13に付属すると考えられる、無窓の鐔である。鉄製で倒卵形を呈し、長径7.0 cm、短径5.4 cmを測る。茎孔の周囲は厚手で、内側に木質が付着している。

15は、刃長16.6 cm、現存茎長5.2 cm、身幅1.7~2.3 cmを測る。平棟平造りで、棟肉は薄い。鋒はふくらである。鋒と関の近くに、磨減りがみられる。両関で、茎尻は欠けている。目釘穴は、錆化のため判断できなかった。16は、刃長11.5 cm、茎長5.1 cm、身幅1.4~2.0 cmを測る。平棟平造りで、棟肉は薄い。鋒から刃部中央にかけて、磨減りがみられる。両関で、茎には木質がよく残っている。栗尻で、目釘穴を有す。17は、小型の刀子で、刃長9.7 cm、身幅1.3~1.8 cmを測る。棟肉の薄い、平棟平造りである。両関で、茎の殆どを欠損している。

轡（第20図、18・19）2つの轡は、いずれも鉄製環状鏡板付のものである。18は、造り付けの立間を持つ轡である。左側の鏡板の一部と、引手壺が破損している。図示した環が、この轡の引手壺となるかどうか、疑問の余地がある。鏡板は、立間を含めた長径9.8 cm、短径9.3 cmを測る。環部は横長の楕円形を程する。環の断面は蒲鋒形である。立間は大型で平坦な造りである。横幅の広い孔を有している。環部との接合部分の稜線は明瞭である。引手は、長15.1 cmを測る。先端を環状に丸めて、くの字形に屈曲させ、引手壺としている。振りはみられない。連結部の環は、2つに割って中央で接合させる造りである。銜は、二連式で、長17.5 cm程である。先端の環は大型である。左側の金具は、中央の所で90°振り加えられている。他に振りみられない。銜先の環に、鏡板と引手をそれぞれ通すという連結方法をとっている。

19は、瓢形の環状鏡板を持ち、連結に橋金具を用いる轡である。両方の鏡板の立間先端



第20圖 瓦冢古墳群中出土鉄器実測圖(2)

部分と、左側の引手壺を欠損している。図示した環は、接合はしないものの、形状や屈曲が似ており、本資料の欠損部である可能性が高い。鏡板は、長径9.0 cm、短径8.0～8.5 cmである。断面隅丸方形の鉄棒を、瓢形に造っている。立間は均整のとれた長円形で、付け根はよく括られており、丁寧な造りであると言えよう。引手は、長14.6 cmを測る。引手壺は丁寧な造りで、鉄棒の先を2つに割り、環を造り、中央で接合したものと考えられる。左側の引手には、若干の換りが加えられている。銜は、錆化と剥落のため細部の観察は困難であるが、二連式であり、両方の先端は橋金具に連結している。長16.5 cmを測る。環はすべて小型である。左側の金具は、くみに近い部分で90°換られている。橋金具は、長径3.4 cm、短径3.1 cmの、やや角ばった円環である。この金具に、鏡板・引手・銜を通して連結するという方法を採用している。

飾金具 (第20図 20-25) 飾金具は、鉄が4個のものと、3個のものと、2個のものがあがり、2点ずつ、計6点が所蔵されている。すべて鉄地金銅張製である。鉄の地板の表面を、金銅板で覆い、これに頭に金銅を被せた鉄を打っている。20・21は、菱形を呈し、4隅に各1鉄を打っている。横5.0 cm、縦4.0 cmを測る。22・23は、横2.9 cm、縦2.5 cmを測る。2隅に丸みがある方形で、3鉄を配する。24・25は、横1.5 cm、縦3.0 cmの長方形で、やはり2隅に丸みがあり、2鉄を有す。

鉸具破片 (第20図 26・27) 26・27は、断面円形の鉄棒である。小型の鉸具の破片であろうか。

轡破片 (第20図 28-30) 鉄環3個が所蔵されている。引手壺などの、轡の破片であろう。

鉄刀 (第21図 31-34) 鉄刀は4振が所蔵されている。31・32は大刀であるが、33・34は身幅や茎が小さいことから、刀であると考えられる。

31は、本製の鞘尻が良好な状態で保存されている、大変貴重な資料である。刃長85.7 cm、茎残存長17.0 cm、身幅3.5-4.1 cmを測る。刀身は、平棟平造りで、棟肉はやや厚手である。所々に木質が残っている。鋒はふくらである。関は片関で、斜方向に切れ込んでいる。茎は、幅2.0-2.3 cmと幅広で、木質を残している。関に近い所に、目釘穴がある。茎尻は欠損している。本資料は、木製の鞘の俣表側が、尻から9 cm程遺存している。鞘は板目材を用いている。断面で表現するならば、年輪の中心が瓢裏の方向になるような木取りとなっていると言える。表面と小口には、鋭利な加工痕がみられる。鞘尻から4.5 cmの所には、幅8 mm程の樹皮を、3重に巻いている。合せ造りの鞘であり、これを固定・補強したものと考えられる。鞘木の内側は薄く割られており、この部分に刀身が収まるように、造られている。

32は、錆化が著しく、関は明瞭ではない。現存長87.0 cm、身幅3.5-4.4 cmを測る。平棟平造りで、棟肉は薄い。鋒はふくらで、先端が欠損する。

33は、現存する刃長36.6 cm、茎長8.6 cm、身幅3.6 cmを測る。鋒に近い部分の刀身は失われている。平棟平造りで、棟肉は薄い。佩裏は木質が良好に残っている。関は両関である。茎の中央に目釘穴がある。茎尻は、一文字尻である。図示した鞘尻金具は、この鉄刀に伴うものと考えられる。鉄製で、内部の木質をよく残している。幅は4.6 cm程と推定される。薄手の造りである。

34は、現存する刃長20.0 cm、茎長8.8 cm、身幅3.2 cmを測る。刀身は大半を折損している。平棟平造りで、棟肉は薄い。木質を多く残す。鉄製金具が、装着したまま遺存している。金具内部には、木質が残っている。関は両関で、茎は幅狭である。茎尻は一文字尻で、近くに目釘穴がある。

尚、これらの遺物のうち、15、16、18、31は、宇都宮市立築瀬小学校に、他は豊郷公民館に保管されている。

註1. 刀子と呼ばれる利器の中には、武器に使用されたものもあり、また工具として使用されたものもあろう。本古墳出土の刀子は、鉾などの刀装具を伴っており、明らかに武器に加えてよいと考える。

註2. 白杵熊 「古墳時代の鉄刀について」『日本古文化研究』創刊号 1984年 P 68

註3. 小野山節 「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系 第3巻(日本Ⅲ)』1959年

山ノ井清人 「環状鏡板付巻の編年と系譜—特に五箇古墳・小野集根第4号墳の位置付けを目的として—」『唐澤考古』第2号 1982年 P 45-46

註4. 岡安光彦 「いわゆる「素環の巻」について—環状鏡板付巻の型式学的分析と編年—」『日本古代文化研究』創刊号 1984年

註5. 註2文献

註6. 後藤守一 「日本歴史考古学」1937年 P 162

末筆ではあるが、本稿で論文を引用させていただいた方々、また、御指導をいただいた宇都宮市教育委員会、栃木県立博物館、財団法人栃木県文化振興事業団の方々に記して謝意を表す次第である。

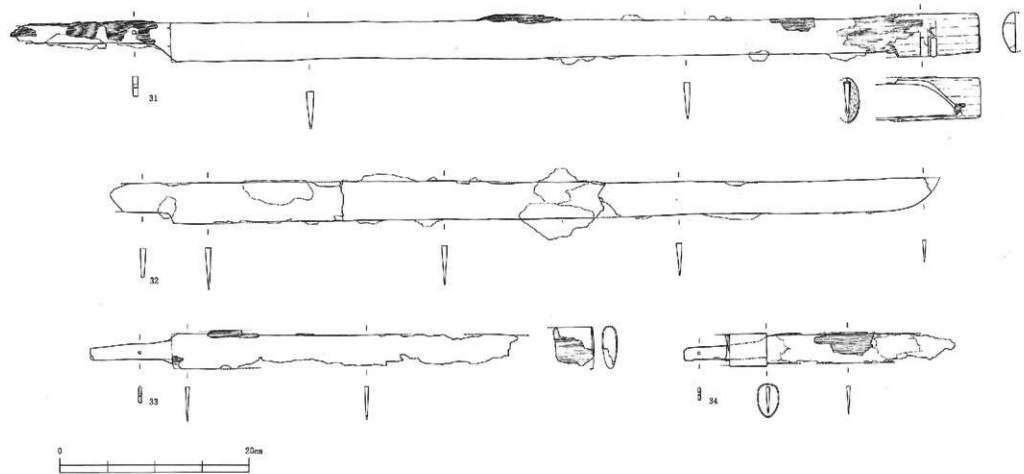
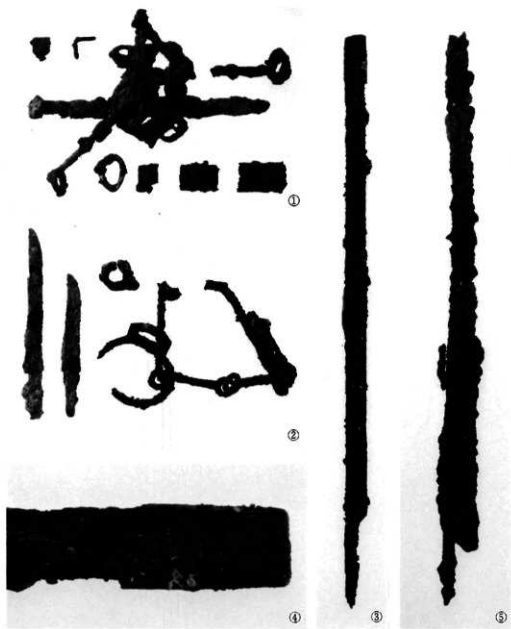


图21 瓦砾古墳群中出土鉄器実測図(3)



- ① 聖山公園6号墳土坑1出土櫛・刀子・刀装具等
 ② 瓦塚古墳群中出土櫛・刀子
 ③ 瓦塚古墳群中出土鉄刀
 ④ 同鋒部木質遺存状態
 ⑤ 聖山公園6号墳土坑1出土鉄刀

图 版

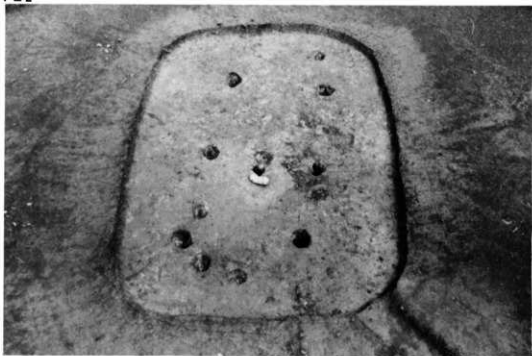


(1) 遺跡全景 (南上空より)



(2) J-1~3号住居跡全景 (西方より)

PL 2



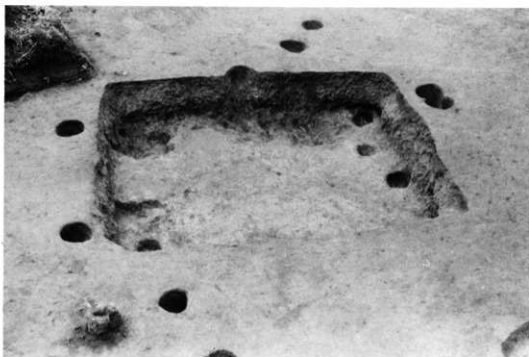
(1) J-2号住居跡 (南方より)



(2) J-3号住居跡 (西方より)



(1) 30号住居跡 (西方より)

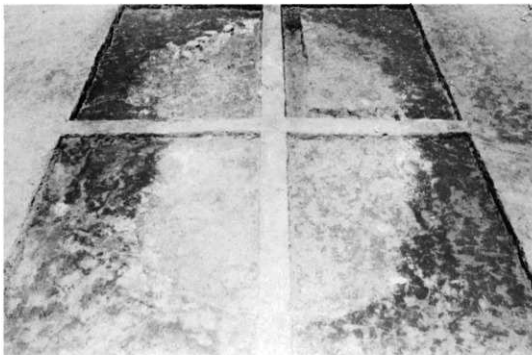


(2) 27号住居跡 (南方より)

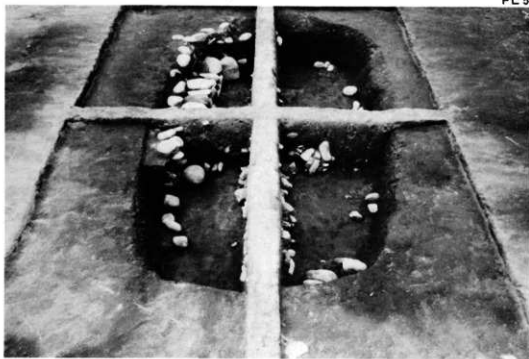
PL 4



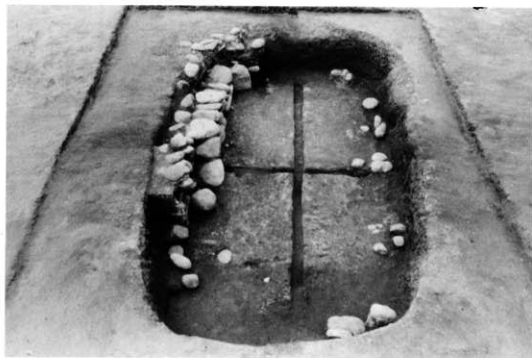
(1) 発掘前の6号墳全景（南方より）



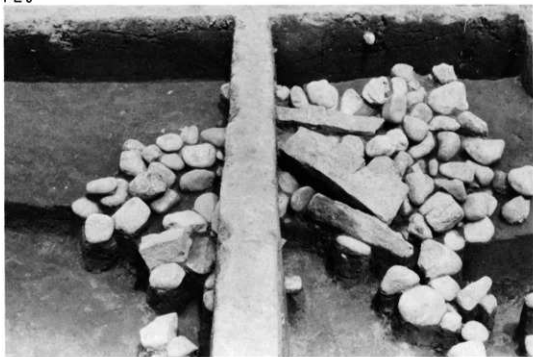
(2) 6号墳主体部確認状況（南方より）



(1) 6号墳主体部調査状況(南方より)



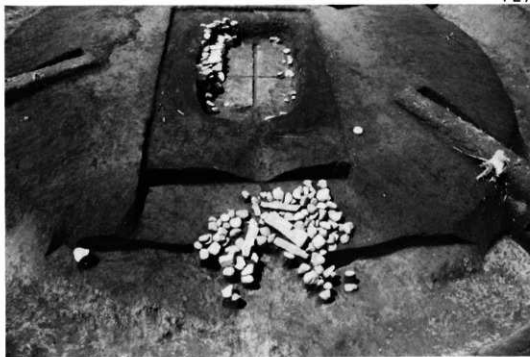
(2) 6号墳主体部(南方より)



(1) 6号墳前庭部石敷(南上方より)



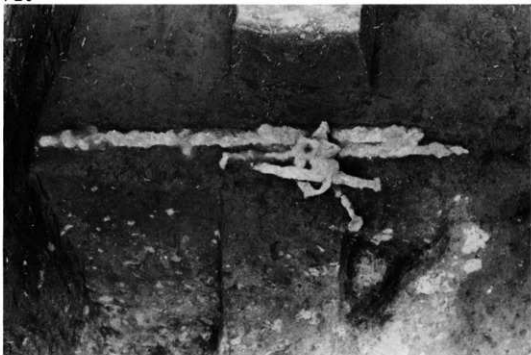
(2) 6号墳前庭部石敷(東方より)



(1) 6号墳主体部付近全景 (南上方より)



(2) 6号墳全景 (南上方より)



(1) 6号墳土坑1上鉄器出土状況(北上方より)



(2) 6号墳土坑1確認状況(西上方より)

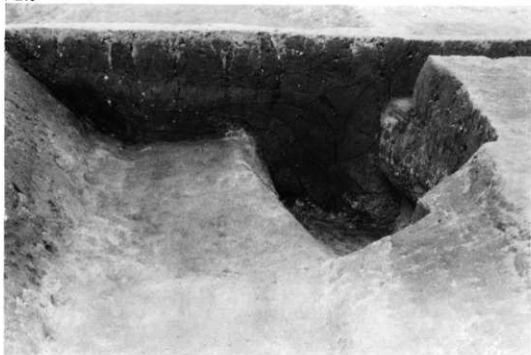


(1) 6号墳土坑1断面 (西より)



(2) 6号墳土坑1 (北西上方より)

PL10



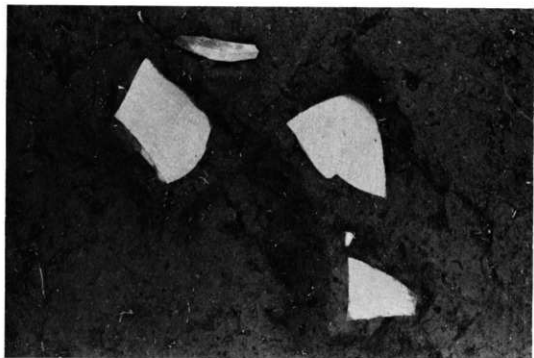
(1) 6号墳土坑2断面 (南方より)



(2) 6号墳土坑2 (西上方より)

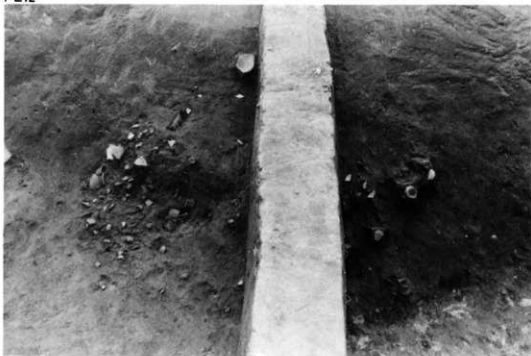


(1) 須恵器壺出土状況1)



(2) 須恵器壺出土状況2)

PL12



(1) 6号墳周溝北西部手づくね土器・土師器群出土状況1)



(2) 6号墳周溝北西部手づくね土器・土師器群出土状況2)



(1) 6号墳周溝北西部手づくね土器・土師器群出土状況1)



(2) 6号墳周溝北西部手づくね土器・土師器群出土状況2)

PL14



(1) 6号埴土器師懸1出土状況(西上方より)



(2) 6号埴須恵器提瓶出土状況(西上方より)



(1) 6号墳須恵器平瓶出土状況（南上方より）



(2) 6号墳須恵器平瓶出土状況（北上方より）



10-1



10-2



11-6



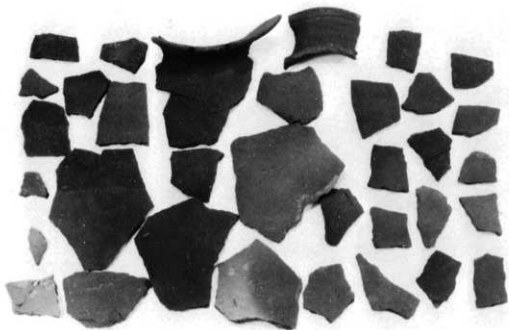
15-2



15-1 (前面)



15-1 (背面)



(1) 6号墳出土須恵器断A



(2) 6号墳出土須恵器断B

PL18



6号墳出土手づくね土器

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第18集

聖山公園遺跡Ⅲ

昭和60年3月発行

発行 宇都宮市教育委員会社会教育課

(宇都宮市中央1-1-13)

TEL (0286)37-2111

印刷 株式会社松井ビ・テ・オ印刷

(宇都宮市平出町4287-7)

TEL (0286)62-2511
